

薄型DLPプロジェクト特集に寄せて

Foreword to Special Issue on Ultra-Thin Rear Projector



西田信夫
Nobuo Nishida

薄型テレビは、かつて“夢の壁掛けテレビ”と呼ばれ、文字どおり夢であった。その薄型テレビとして、2000年ごろ、32インチのプラズマテレビや28インチの液晶テレビが市販され、よく売れていると聞いたとき、なぜ売れるのだろうかかと不思議に思ったものである。画質や価格の面では、まだブラウン管テレビの方に分があると思ったからである。しかし、1年ほど前、“今度テレビを買うときは、プラズマにしようか、液晶にしようか”と考えている自分に気が付いた。

その後、電気店に行ったときなど、プラズマテレビと液晶テレビを比較するようになった。画質は、液晶テレビの方が良いと思ったが、これはそうではなくて、液晶テレビは電気店のような明るい所でのコントラストは良いが、暗い所でのコントラストはプラズマテレビの方が優れており、液晶テレビは、見る角度によって色調が変わるといのが関係者の意見であった。このように聞いて思ったことは、“それならば、小型液晶パネルやDMD(デジタルマイクロミラーデバイス)などのマイクロディスプレイデバイス(MD)を用いたリアプロジェクションテレビ(PTV)はどうだろうか?”ということであった。

家庭用PTVは、1978年ごろに小型CRT(陰極線管)を用いたものがアメリカで実用化された。それは、1本のカラーCRTを用いるもので、画面は暗かったが、それでも売れたとのことである。その後、輝度や解像度が改善されて、アメリカではずいぶん普及し、2004年でも360万台ぐらい売れている(この年には、MDを用いたPTVも延びてきている)。しかし、我が国では、家庭用としてはほとんど売れなかった。

CRTを用いたPTVが我が国で売れなかった理由として、よく日本の家の狭さが挙げられるが、日本人の画質に対するこだわりも挙げられるのではないだろうか。

このように思いながら、今年の4月に開催された国際フラットパネルディスプレイ(FPD)展に行った。FPD関係の展示会だったためか、PTVの展示は少なかったが、筆者のそばでPTVを見ていた若い二人づれが発した“これがリアプロ?きれいだなー”という声に筆者も思わず同調し、この画質なら間違いなく我が国でも受け入れられると確信したのであった。そしてさらに、5月に開催されたSID(情報ディスプレイ学会)の国際シンポジウムで、三菱電機がDMDを用いて62インチの画面サイズでありながら奥行きが26cmのPTVを開発したことを知って、少なからず驚いたのであった。プラズマテレビや液晶テレビの奥行きが10cm程度といっても、50インチ以上の据え置き型の場合、スタンドの奥行きは30cm以上である。したがって、奥行きが26cmなら、これはもう立派な薄型テレビである。

このように、MDを用いたPTVは、我が国でも普及する条件を十分に備えているが、各社とも、国内市場への投入に慎重過ぎた嫌いがある。半年ぐらい前からようやく国内展開を本格化したようで、広告も増えてきているが、まだ消費者がPTVを理解しているとは言い難い状況である。PTVの真の姿を消費者に理解してもらうためには、技術展での展示だけでなく、店頭展示などにももっと力を注ぐ必要がある。消費者が、店頭で、PTV、プラズマテレビ、液晶テレビをじっくり比較し、その中から自分の要求に合うものを選択できる環境を整えれば、我が国でもPTVは着実に普及していくと期待している。